



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会



ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2022/12/1 No.91

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

天使のお告げ



望みの門京葉後援会

副会長 真壁 巖



最初のクリスマスの時、マリアの夫ヨセフの胸中がどんなだったか、想像したことがある

りますか？きっと「おめでとうー」どころか心引き裂かれるような思いだったはず。その理由は「母マリアはヨセフと婚約していたが、一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった」(聖書)からです。ヨセフが単に正しいだけの人間なら、マリアと離縁していたでしょう。でもそれができずに悩み苦しむヨセフに、神様は夢の中で計画を示されました。

天使は告げます。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい」(聖書)と。そのお告げ通り、イエス様はヨセフとマリアの子として誕生し、世の救い主となったのです。望みの門でも毎年、クリスマスにこの場面が演じられます。見る人すべてに神様の温かい愛が届けられる場面です。

しかしヨセフの心の中では、自分の子ではない命を宿したマリアの夫にどうしてなれる

だろうという問題が解決しないままです。ただその問題で思い悩み、激しく動揺するヨセフと一緒に神様がいてくださる事実を天使はまた知らせています。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。これは、神は私たちと共におられるという意味です。」

(マタイ1・23)

きっとヨセフは愛するマリアのことで悩まされながら熟睡できずにいたはず。だからこそ、ヨセフは天使のお告げを聞いたのです。もしかするとクリスマスの恵みは問題を解決する恵みではなく、神様が共にいてくださるなら「これでよい」と問題を引き受け、なお希望をもって生活できることなのかもしれません。

ある人は「それは現実逃避だ」と言うかもしれませんが。確かに悩み苦しみを考えないようにするならそうでしょう。でも悩み苦しみを直視して、「それでも神様が共にいられます」という天使のお告げを聞いた人は、「自分の人生これでよし！」と納得することができるのだと思います。

野尻千穂子さんは十二歳の時に下半身麻痺になりました。絶望のあまり病院の屋上から飛び降り自殺を考えた母親に対して彼女は、

「これが私に与えられた人生なら、私は死なない」と告げました。そんな千穂子さんが長じて一人の青年と巡り合い、結婚します。その青年も脳性麻痺で足が不自由でした。将来を心配した両親はその結婚に反対しますが、二人は教会で結ばれます。まもなく彼女は妊娠し、再び大きな決断を迫られました。「障害児が生まれるかもしれない」と医師が告げ、友人たちも彼女の命の危険を思って出産に大反対したのです。でも千穂子さんは「たとい自分は死んでもいい。一つの新しい命を生み出すことができれば」と話し、夫も彼女を支えるように断言しました。「万一障害児が生まれても、仲間が一人増えたと思えばいい」と。素晴らしい言葉です。間違いなく、この夫婦も天使のお告げを聞いたのでしょうか。



ユーラシア大陸ひとり旅（2）

相談役 井本 義孝



イタリアの南端ブリ
ディシ港を二十一時半
に出発したアツピア号
はアテネ（ピレウス港）を
目指し、紺碧のア

ドリア海を走る。夜明け前、デッキに立つと本当に美しい真青な海に思わず飛び込みたくなる衝動を感じる。船はまるで遅る様に快適に走る。このまま下船せずにと乗り続けたいと思う。丸一日走り、やがて夕刻七時頃ギリシャのピレウス港（アテネ）に入る。

ホテルの予約もなく、束縛されるものは何もないので、のんびりとぶら歩きする。旅の醍醐味はぶら歩きである。これが、何時何分にどこそこで待合せとか、云うなれば、その制約のため折角の旅の解放感というか、自由きままな得難い人生の貴重な一刻を失う事に相成るからである。願わくはもう一度来たいものだ。近くの小さなホテルに泊る。ギリシャの第一印象は人なつこい親しみやすい感じ。夕食をタベルナ（食堂の意）で摂ったが食べた気がせず外へ出掛ける。町で食べた黒鯛に似たオリープ油でいためた様な魚はうまかった。ギリシャは魚に限ると納得。

アテネでの初めての夜、熟睡する。ここはギリシャだと漸く合点。今日はかのオリンピック発祥の地オリンピアを探訪する。外に出ておまわりさんを見つけ尋ねる。土地不案内なので仕方がない。おまわりさんは中々親切である。教えられるままにバスに乗り午後一時近くオリンピアに着く。何もない静かな村である。昼食は焼肉、スパゲッティ、ビー

ルでオリンピアに乾盃、約千円、安い（半世紀前）。オリンピック発祥の地、亭々と天に摩す大松、苔むす神殿基石、円柱、古代ギリシャ繁栄の跡、梢をわたる一陣の風。今吾れに何を語らんとしているのか。悠久の一刻に身を置き感慨にひたる。

訪れる人もなきオリンピアに別れを告げ、トリポリス行のバスに乗る。ここはスパルタ、コリント、ミケーネに通じる交通の要衝、夕刻到着し一泊する。快眠する。夜明け前は可成り冷える。

朝、九時発のアテネ行は二両連結の可愛い列車、車中は賑やかである。イタリア人とは全く感じが違う。

十一時一寸過ぎにアルゴス着、エピダウロスの遺跡をバスにて見物後アルゴス駅に又戻る。本日の列車はない。バスセンターまで歩く。よく歩いた一日であった。お陰でギリシャの裸の生活を少しは体験できた。この民が幸せになることを心から願わずにはおれない。

十八時三十分のミケーネ行のバスで約十キロ先のミケーネの小さな村に到着。ホテルは二人室で80ドラクマ、シャワー付きで快適。

六時起床、七時にカメラ片手にアクロポリスに行く。日本晴れの快眠の後の何とも気持ちのよい朝である。なだらかな山腹をぶらぶらと古代の人間模様様に思いを馳せつつ歩く。

一千八百年半ば有名なH・シュリーマンが発掘を手がけたトロイアの遺跡と共に世界の注目を集めたところである。

古代ギリシャの伝説的戦争の発端となったスパルタの王妃ヘレンをトロイアの王子パリスが奪ったことにより戦いは十年に及んだ。トロイの木馬で名高い奇計でトロイアを陥落させたギリシャ軍の総大将こそこの居城の主、アガメムノンである。

ここはアルゴス平野を一望にし、両側を七百メートルから八百メートル岩山に囲まれた場所ので戦いを偲ぶすがとてないが、アキレウスの宝庫跡をみる。シュリーマンの執念に甦った古代ギリシャの繁栄の跡に文明興亡の空しさを感じる。アクロポリスを下りる。再び山を見る。思わず「われ山に向いて目を上ぐ、わが救いはいずこより来るや」詩編121編を口ずさむ。

ミケーネ駅まで歩き十一時発のアテネ行きに乗る。コリント十二時。新約聖書 使徒行伝によるとパウロはこの地でアクラとプリスキラに出会った。そして一緒に天幕づくりをした。彼はこの地に一年半とどまり大いに伝道に努めた。



東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 手は何のために創られたのか 三年ぶりのバザーに寄せて

生活指導員 尾家 美穂

澄みきった青空の下、緑の芝生に鮮やかな赤や黄色の絨毯を敷き、落ち葉が陽射しに光輝く季節です。そのコントラストの眩しさに空を見上げると、黄色いスカートを広げ銀杏の葉が風に乗り、クルクル回るバレリーナのように次々と舞い降りて来ます。私は、この季節の空が大好きです。しかし今年は、この同じ空を、怯えた目で見上げ、今この瞬間にも、爆音や銃弾の雨の中を、逃げ惑っている人達がいる事を思うと、気持ちちは晴れません。

そんな中、コロナの行動制限が緩和され、先日三年ぶりに霊南坂教会でバザーが開催さ



れました。東京望みの門も出店させて頂き、机一台分のブースには、後援会の方々が、寮生達の暮らしを想い、愛情をこめて創ってくれた作品を所狭しと並べました。クリスマス用のタペストリーやオーナメント、布や毛糸で作られた手のぬくもりを感じさせる作品が中心です。また寄贈されたバックや小物等、寮生が選ばなかった物も【掘出し物市】の様な楽しい空間作りに一役買ってくれました。

コロナ前は「手仕事会」として、後援会の方々が毎月二回マナの家に集い、皆さんで作品創りをしてくださっていました。ここ三年は密を避け、ご自宅での作業で多くの作品を生み出してくれています。今回は皆さんが、バザーの為に用意してくれていた作品を持ち寄っての展示でした。新型コロナウイルスの感染者数も多く、三年前に比べ来場者数は、かなり減少していました。それでも国が平穏じゃないと、イベントを実施することもできません。今年、無事に開催できた事に感謝しています。最近発行された『すべては神様が創られた』という絵本の中に、「手は武器を持ったためではなく、奪うためでもなく、誰かを抱きとめるため、支えあうために創られた」という一文があります。「東京望みの門」の後援会の方々は、それを体現してくれています。今、世界中で戦争している国は二十四カ国

もあるそうです。一日も早く、戦争が終結し平和な日々が訪れる事を祈っています。

婦人保護施設 望みの門学園

千葉県教会音楽祭に参加して

看護員 堀内裕美子

十一月三日、日本キリスト教団西千葉教会において第五十二回千葉県教会音楽祭が行われました。新型コロナウイルス感染症の拡大により三年ぶりに規模を縮小して開催、六団体のみの参加でした。学園に配属となって二年の私にとって、教会音楽祭参加は初めての経験でした。

パイプオルガンの音が響き、第一部の礼拝の後、第二部「音楽のささげもの」として各団体の発表が始まりました。学園の選んだ曲は創立六〇周年記念事業で制作した讃歌のうち「主の愛が」と「この幸せをありがとう」の二曲でした。いずれも学園の利用者さん、職員が作詞し、木下勝世副理事長が作曲してくださったもので、ソプラノ、アルト、バリトンの混声三部合唱です。毎朝十五分ほどの歌の練習と、月に一度木下副理事長のご指導をいただき発表に臨みました。仕事のために参加できない利用者さん、職員もいて、練習に

全員が揃うことはありません。全員でどれだけの大きな声になるのか心配もありました

が、発表当日はいつも以上に大きな声で、私たちの歌声をお届けすることができました。

どの団体も素晴らしい歌でした。特に、木下副理事長の所属する日本キリスト教団西千葉教会はアカペラでの混声合唱で、とても心に響きました。他にもソロパートのある曲や、楽器演奏を交えた曲指揮に合わせてピタリと声を止めるなどベテランを感じさせる団体ばかりでミニコンサートのようでした。

若い頃、ほんの興味からチャペル結婚式の聖歌隊のアルバイトで讃美歌を歌ったことが



あります。それから数十年、のぞみ会に入職し、また讃美歌に出会いました。特に学園に異動してからは、毎日の朝会を始め、誕生会やクリスマスなどの行事で必ず讃美歌を歌い、讃美歌が少しずつ身近に感じられるようになってきました。クリスチャンではないので、神様に捧げるとはおこがましくて言えませんが、これからも心を込めて歌いたいと思います。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

栄養士としてのやりがい

栄養士 白井 絵理

二〇二一年四月一日に入職して来年で二年楽生園の栄養士としては、今年の十一月一日で一年を迎えました。

入職して間もない頃は、栄養士業務・厨房業務のマニュアルを読み込むこと、先輩の背中を追いかけて技術やコツを学ぶことに精一杯でした。実家を離れ、初めての一人暮らしに疲れたり、同年代がいないう職場で新しく人間関係を築くこと、上下関係に悩み涙を流す日もありました。

そんな情けない私でも、すかさず「がんばれ！負けるな！」・「辛いときはいつでも相談

しにおいて」と慰めの言葉や、応援の言葉をかけ支えてくれた先輩職員がいます。

おかげで私は今日まで何事も粘り強く頑張ることができました。少しでも強くなれた気がします。

去年は十二月から、献立作成・発注業務に主体で取り組ませていただいています。まだまだ不完全なところはありますが、「おいしいよ」「いつもありがとう」と笑顔で話しかけてくれる利用者様に栄養士としてのやりがいを実感しています。

楽生園の栄養士としては、まだ管理栄養士の資格をもっていない為マネジメントはできませんが、日々利用者様の摂食状況やその日の体調について、実際に食事介助をしたり、自分の目で見て把握すること、利用者様の些細な変化や気になることは支援員・現場職員に確認・相談し、共に支援が行えるように努めています。

来年はコロナが収束することをお願い、外出やその先での外食等、利用者様がアクティブに楽しめる行事を一緒に計画してい



きたいです。

食事が毎日の楽しみである利用者様にとって、安心・楽しい・美味しい食事を作る為、これからも一生懸命に頑張ります。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

望みの門紫苑荘に就いて

介護員 森田ゆうこ

望みの門紫苑荘へ入職して今年が三年目の秋になります。入職した時は不安もありつつ、周りの先輩方に助けられながら試行錯誤しながら経験をしつつ、自分なりの介護を確立してきている自覚が出てきました。

今年の一月には介護福祉士の資格を取得しました。資格を活かしこの一年新たなスタートを切ろうと意気込んでいたところでした。しかし、半年たった夏。施設にとっても大きな問題が起きてしまいました。世間で流行っているコロナウイルスの陽性反応が利用者に出たのです。いずれはうちの施設も……とは考えていましたが、感染症対策として、マニュアルの作成や備品等の確認はしていたものの実際に経験すると相違の部分もありました。利用者様の大半が感染してしまう状況となり、職員も感染してしまい人員不足も生じて

しまいました。

日々、不安や心配などもありましたが、

法人内の他施設より職員の派遣を



して頂き総合福祉施設の強みを感じました。他施設からの協力により、皆で知恵を振り絞り試行錯誤することで徐々に元の生活に戻り施設の危機を無事に乗り越える事が出来ました。この時の事はずっと忘れられないと思います。ただこのクラスターを経験したことは逆に今後の介護に活かせる貴重なものだったと思います。クラスター後は起きたことを振り返り、万が一また発生した時の対策ができました。必要な備品。職員の配置。利用者の隔離方法など。もっと利用者様も職員も前回よりも感染を抑えられると思います。

クラスターも収まり三年目の後半戦が始まります。大きな問題がないことを祈りながら気持ちを引き締めて初心に帰っていきます。



特別養護老人ホーム 望みの門 富士見の里

ミヤンマーからの技能実習生

介護員 前田 緑

クリスマスおめでとうございます。

本年も大変お世話になり心よりお礼申し上げます。富士見の里一階に初の試みでミヤンマーから技能実習生二名を受け入れて早くも半年を迎えようとしています。受け入れが決まってから実際に彼女たちに会うまでは、不安で一杯でした。

ミヤンマー語は話せないし、どう接したら良いだろう？何を、どう教えたらいいのだろう？と考えていました。当日彼女たちは、「おはようございます。よろしく願います」と元氣よく笑顔で出勤してきました。とても日本語が上手で驚いた半面すこしホッとしている自分がありました。

彼女たちは、きちんと基礎を学んできているので教えるスタッフ側も、変なことを教えるてはいけないと気合が入っています。日本語も、技術の呑み込みも早く排泄介助、食事介助、入浴介助、シーツ交換も、自ら率先して動けるまでになりました。彼女たちの笑顔と優しさが、利用者様や周りのスタッフに、良い影響を与えていると思います。介

護部以外のスタッフの皆さんからも

「明るくていいですね」との声があり、技能実習生に係るスタッフだけでなく、他の部署の方からも好印象を持っていたいています。

また、何気ない質問をされ答えたり、一つの介護を行う理由を説明したりすることで日ごろのケアを振り返る事が出来ています。実習生共々、互いに成長していくことができるよう取り組んでまいりたいと思います。

小雪の候、皆様に於かれましては、くれぐれもお身体ご自愛ください。

これからも変わらぬお付き合いの程を宜しくお願い申し上げます。



老人デイサービス事業 望みの門 デイサービスセンター

笑顔が支えの日々



介護員 山本しのぶ

望みの門 デイサービスセンターに勤務して五年が経ちました。初めての介護の仕事と

あって戸惑い、毎日が勉強の日々だった事を思い出します。

そんな毎日の中で、利用者様の「笑顔」「ここに来るのが楽しみ」「楽しかった」などのお声を聞くと、私まで幸せな気持ちになったと感じました。

数年前からコロナの感染が拡大し、今まで行ってきた外出・外食など様々な行事が中止となっていきました。

思っていた以上にコロナの影響は長く、行事を楽しむにしている利用者様からも、がっかりする声が聞こえてくるようになりました。今までは違うサービスが提供できないか、職員一同で話し合い、少しずつ行事がなくなっても楽しく過ごして頂けるサービスの提供が始まりました。

月一回、施設内でイベントを行うことで利用者様にも楽しみが増え、楽しい時間を過ごして頂けるように



なるのではないかと実施したところ、職員と利用者様と一体となり有意義な時間を共有することが出来ました。

畑も活用し、キュウリやトマトを植えて育てました。収穫は利用者様と行い、浅漬けにしておやつの時間に食べました。とても好評で「美味しい」という声が聞けました。畑は春に向けて、花を育てる準備を始めました。咲いたら利用者様のテーブルに飾りたいと考えています。これからも、着任したての私を救ってくれた利用者様の「笑顔」を見られるように取り組んでいきたいと思っています。



就労継続支援事業 望みの門 新生舎 利用者の隠れた力を見つけ 皆が輝ける場所に

職業支援員 小倉 貴大

「おはようございます！おぐらさん！」毎朝、目が覚めるような皆の元気な挨拶から新

生舎の一日は始まります。長年、高齢者福祉の分野に携わってきた私がこの新生舎に赴任して約十ヶ月。まだまだ未熟で勉強することばかりですが、この数ヶ月で感じた事をお伝えしたいと思います。私は現在新生舎の第一作業部に所属し、十五名の利用者の皆さんと共に主にベーカリーでパンやクッキー作りを行っています。利用者の皆さんは様々な障がいを抱え、苦手な事やできない事も多くあり、どうしても社会の中では助けが必要な「弱者」と見られがちなのが現実かと思われま。しかし、新生舎での毎日を共に過ごしていると時に私たち支援員にもできないような驚く力を発揮することが多々あります。クッキーの生地を伸ばす成形作業は支援員よりも上手（ちなみに私は非常に下手です）、ジャムリングクッキーのジャム塗りだけは誰よりも綺麗、五十種類以上はあるパンのラベル番号を全て暗記している、言葉が出づらさが常に周りを見てさりげなく助けてくれる、床掃除をさせたら右に出る者はいない：等々、あけれ



ばキリが無いほどです。私たちの仕事はその隠れた力を見つけ、引き出し、成長をさせることだと思えます。新生舎の利用者の皆さんはとにかく真面目で一生懸命で、「さぼる」なんて言葉は皆無です。もちろん個々に配慮しなければならぬ事も多いですが、ベーカリーで一様に働いていると、そこでは障がい者と健常者の境なんて無くなってしまい、利用者の方から仕事を教えてもらうこともある程です。私たち福祉に関わる人間はついその方の課題や弱い部分に目が行きがちになってしまします。そうではなく、その方の「できること」「強み」を第一に考え、粘り強く寄り添って支援することが大切だと、新生舎に来て改めて痛感させられました。社会全体が新生舎のようになつたら、きっと障がいのある方ももっとと輝くことができ、理想的な社会になるはずと手前味噌ですが、考えております。明日も新生舎を利用さ



れる皆さんが「輝ける場所」になれるように、支援員として頑張りたいと思います。

共同生活援助事業 グレースホーム



終の棲家

世話人兼生活支援員 加賀 隆太

令和四年八月、当グループホームで初めて所属されている利用者様がお亡くなりになりました。享年七十五歳でした。

昭和六十年望みの門学園に入所。そして平成十七年グレースホームへ入居され、十七年間を当ホームで、三十七年間を望みの門で過ごされました。出来る限りの追悼をしたいという想いから、コロナ禍ではありましたが、去る八月三十日「お別れ会」を実施致しました。初めてのことでバタバタとしましたが、理事長をはじめ、多くの所縁のある方々に追悼いただき、故人のご家族様からも感謝の言葉をいただくことが出来ました。

人生最後の時間をどこで迎えるか、グループホームが最期を迎えるまで生活する住まいとなり得るのか、当グループホームとしても大きな課題となっています。

日本社会の高齢化は二十九・一%、富津市では三十九%程度とされています。当ホーム

では、構成年齢六十代以上が四〇%、五〇代以上となると六〇%となります。支援区分は三以上が七〇%で、生活される始どの方が生活介護を必要とする状況であり、高齢化も相まって医療と介護の提供が益々必要となってきています。

障がい福祉の現場、ことさらに入居生活を送る現場では、一〇〇%言語での相互理解が可能ではない中、ご本人が幸せであるか、そうであったかは伺い知ることは非常に難しいことです。このテーマでの研修では、障がい福祉サービスと介護保険の選択、設備、人員配置で苦勞されている話を伺いました。

尊い人生を当ホームで終えられ幸せであっていただきたい。そうしなければならぬと自問自答し今後この課題に向き合っていくことでしよう。

最後に、故人が幸せであったことを願い、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 始まったばかり!の福祉人生

相談支援員 田中久美子

以前勤めていた高齢者施設で、認知症の利用者さんが、施設を出たまま戻ってこないという出来事がありました。真っ青になって、車で探しました。通行量の多い道路を足早に歩いている後ろ姿を見つけ、声がけをして乗ってもらいました。しかし次の瞬間、車を降りて駆け出し、見ず知らずの車を止めてその助手席に乗り込んでしまったのです。

運転席の女性に詫びながら当人をなだめすかして降ろそうと試みるも、頑として動きません。すると、女性が言いました。「このまま施設まで送っていったらあげるよ。あなたの車についていくから」……こうして、無事に帰園させることができました。せめてお名前と住所だけでも、と女性に問いかけると、笑顔を残したまま去って行かれました。福祉は、地域の皆様の理解と協力なくして成り立たないことを痛感した、忘れがたい出来事でした。望みの門に就職して一年余り。四月には君津ふくしネットに異動となり、十一月からはグループホーム等支援ワーカー(GHW)という職務に就いています。GHWは千葉県独

自の障害者グループホーム等支援事業のもと、県内十三圏域に各一人配置されています。精神科病院や人里離れた大規模施設に入院・入所している障害者が住みたい場所で自分らしく暮らしていけるようにする地域移行の流れの中で、障害者グループホームとその入居者を支援していくのがその仕事です。

地域移行を進めるにはグループホームを増やしていかなければなりません、「訳の分からぬ建物がどんどん建っている」という困惑の声が寄せられたことがあります。障害者グループホームは儲かるとの考えから異業種参入が相次いでいるのも事実で、住民が抱くこうした不安にも耳を傾ける必要があります。地域の方々の理解と協力が何より大切なことはこれまで見てきた通りです。

話は変わりますが、同い年の友人が、「定年後のことを考え始めている」と語っていました。五十代も半ばになるとそういう心境になる



のでしょいか。七年前に福祉の世界に入ったら私の場合、「まだまだこれから。始まったばかり！」です。来年度には、精神保健福祉士を目指した勉強を始める予定です。

富津市富津地区地域包括支援センター 地域包括支援センターにおける 相談支援員として

相談支援員 竹内 清貴

今年も早いもので新年を迎えるまで残りわずかとなりました。富津地区地域包括支援センター（以下、当センター）における高齢者に関するご相談受理件数も増加しており、当方が担当させて頂いたご相談内容も介護保険申請は勿論のこと認知症を発症されている当事者やご家族支援、施設入所のご相談やケアマネジャーの選定等々、ご支援させて頂く内容も広範多岐なのが現状であります。

前述のようなご相談内容に対応すべく日々どのような支援が適切であるか持てる知識とこれまで培った経験を活用すると同時に不勉強、経験不足から失敗を繰り返すことに己の未熟さを痛感している次第です。そのため当センター長をはじめとする諸先輩方の指導を仰ぎながら今後の業務に努めてまいります。

具体的な支援を日々行っている中で当方が携わっている（きた）利用者の方々には病気や障害、様々な生活環境が起因して日々の生活に「生きづらさ」が生じてきた方が多いと感じております。生きづらさを抱えている方には言語化をして援助希求をすることのできない方もいらっしゃるため時間の許す限り対話を通じて対等な関係性の構築と利用者とその家族の思いを表出できるような支援を心がけて行っております。

高齢者のご相談については複合的な地域生活課題を抱えるご家庭もあり当センターのみの支援では困難な場合も生じてきます。多様なご相談に対応できるよう地域の実情を理解されている児童・民生員の方、居宅介護支援事業所のケアマネジャーの皆様、行政機関、医療機関、福祉事業所の関係者様には今後とも地域連携の観点からご指導、ご協力いただきますようお願い致します。

児童養護施設

望みの門かずさの里

日常業務に携わる心理職として

児童指導員 椎名 翔太

現在の児童養護施設での心理職の現状は、日常業務と兼務し携わる施設と、ほぼ心理処



遇のみ携わる施設に分かれている状況といえます。その中でかずさの里では、前者の取り組みにて心理担当職員が日常業務に携わりながら職務にあたっています。携わり方については、メリット・デメリットが様々語られ賛否両論がありますが、私自身はメリットを重視して考えています。

そのメリットの一つとして、見立てと分析の正確性が挙げられます。多方面から子どもの「生きた本来の一人の人としての姿」を知る過程として、日常の行動観察は必要不可欠です。面接室で見せる姿はごく一部でしかなく、施設内や学校で見せる姿を総合的に知ることその子の理解の手助けになると考えています。そのため、見立てを柔軟に軌道修正しながら子どもたちの状態像を把握し、よりよい支援に繋がれることができるのです。メリットの二つ目として、支援や対応の即

時性が挙げられます。日々の生活状況の行動分析、アセスメントを職員と共有し対応を協議できることが強みです。また、ピンポイントで学校や児童相談所、医療と連携することで共通認識を持つことが可能です。

メリットの三つ目として、障がい特性に特化した生活支援を築けることが挙げられます。近年は特に障がい特性のある子が増加し、児童養護としての養育のみならず、療育を如何に日常生活に落とし込むことができるかが問われています。話の伝え方や言葉のチョイス、生活リズムのルーティン化など特性を理解した上での支援が落ち着いた生活の基盤となります。

デメリットとしては、普段の生活空間や職員と子どもの関係性からの分離が難しいことです。この点に関しては心理室を息抜き場としての活用や時間枠の設定など場面設定を配慮する必要性があります。加えて、客観的視点を確認し続けることが必要です。これも専門職としての知恵と工夫で組み立てられると考えています。

最後に、日常業務に携わりながら心理職を担う身として、子どもの理解を深め、よりよい支援を追求する支援者の橋渡し役になるように心掛けていきたいと七年の経験を基に改めて強く思います。

乳児院 望みの門方舟乳児園 調理員として…



調理員 杉田 みか

私が食に興味を持ち始めたのは、実家が民宿を営んでおり、調理の手伝いを幼い頃からしていたからです。その頃から調理する事が楽しく、好きだったことがきっかけで、いつか調理の仕事をしてみたいと思うようになりました。

それは、大人になっても変わらず、保育園の調理師として勤務することが出来ました。子供たちが「おいしかったよ。」と喜んで食べてくれた時がとても嬉しかったですが、思っていた以上にハードだったので、一度、調理から離れたくなり、調理とは関わらない仕事をしてみました。離れてみる事で気付いたことがありました。私には、調理の仕事の方が向いている、調理の仕事に戻りたいと思うようになりました。



調理師として働くならまた、乳幼児の食事が作りたいと考え、出来る事

なら保育園とは違った施設で調理してみたいと思う、今年の七月から乳児院・望みの門方舟乳児園の調理員として勤務することが出来ました。あっという間に四



カ月がたちました。

乳児園では、離乳食の初期から食事があります。私自身、保育園では、中期からの食事が作ったことが無かったので日々学ぶことがたくさんあります。

八月には、夕涼み会がありました。外での食事で、バーベキューや焼きマシユマロやスイカ割りをしました。子供たちはいつもと違った環境だった為、楽しそうに食事をしていました。このような時間は必要だと思いました。子供たちが少しでも食に興味を持ってくれたことは、とても大事なことだと思います。

私自身、今の仕事を始めたばかりで、戸惑うこともあります。他の職員に相談しなが

ら、今まで自分が経験してきたことを、活かし、安心・安全で美味しい食事をこれからも提供出来るように勤めていきたいです。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園 支援環境のアップデート

児童指導員 吉田 勝

「児童指導員」の仕事って何だろう？と調べる。「子どもの日常生活の支援、社会ルールの習得、学習や遊びなどの支援・指導」とでてきます。「日常」とは何だろう？施設の生活ってそもそも「非日常」じゃないのか？「非日常」を「日常」にする支援をするの？と次から次へと疑問が出てきてしまいます。また人によって「日常」の考え方は違うのでますますわからなくなっています。

コロナ禍を通して一般的な子どもたちにとって大きく変わった事として学校の授業の受け方があると思います。学校に行かずともリモートで授業を受ける環境が急速に整えられ実施されてきました。それによりタブレットのようなデジタルデバイスを小中学生が一人一台貸与され使える環境が整いました。

さて木下記念学園の子どもたちはどうかというと、ネットワークの環境がそもそも無い。

勿論使えるデバイスもない状態でした。

「これって一般的な日常とかけ離れてないか？」「じゃあ何が出来るか？」と考えた結果、今年度は「施設内の子どもの居住エリアに無線ネットワーク環境を整える。子どもたちがデジタルデバイスを使用して使い方を覚えていく。」という事に取り組みしました。

本来ならば業者がやるような作業を少しずつ進めていき、時に設定を間違え様々な職員さんに迷惑をかけながらもネットワークの環境を整えました。若手の職員の力を借りデジタルデバイスの設定を考え、ようやく十一月から子どもたちが自由にタブレットを使って動画を見る、調べ物をする事が出来るようになりました。

施設での生活

という「非日常」を出来る限り「日常」に近づける為に、出来ることを増やすために、環境をより良く変えていきたい。「何が出るか？」と



常にチームで考え木下記念学園をアップデートしていききたい。日々の「日常」への気づきを試行へと進めていくことが、子どもの暮らしが変わるチャンスを生かすことと思っています。



センター長 井本 義樹

クリスマスおめでとうございます！今年のクリスマスは皆さんどうお過ごしでしょうか？

この機関紙がお手元に届くころには、コロナ禍が落ち着き、笑顔の多いクリスマスシーズンを迎えていることを祈ります。

皆さまのご協力もあり、無事、里親支援センター開設一周年を迎えることができました。まだまだ、よちよち歩きの当センターですが今後もご支援を賜りたいと存じます。

さて、長引く新型コロナ禍でなかなか対面支援が難しい日々が続いています。メールでのやりとり、電話で声だけでも聞くことができます。安心感が違うことを改めて実感しています。里親さんたちと色々な話をさせてもらう機会をえる中で、改めて緊急一時

保護の受入が難しいことを知ることができました。その受入を難しくしている理由の一つが、措置解除になった里子のその後が分からないことがあげられていました。私自身も措置期間はどうあれ、一時期でも家族として受け入れた子どものその後が全く気にならないという、ウソになります。子どもとの関係性の好不調に関わらず、子どものその後がわからない不安は、自身の関わりの至らなさ、「あの時もっとこうしていれば。こうやっていればちがったのでは？」と自責の念にかられ、自身の無力感を助長しやる気をそいでしまいがちです。もう一度とそのような喪失感、無力感をえたくないという気持ちが緊急一時保護の受入を難しくしている一因ではないかと感じています。

近年、児童福祉施設等を退所した子どもへの支援、アフターケアの重要性が叫ばれ、さまざまなサービスが用意されるようになりました。退所する子どもに入所していた施設以外にも相談しやすい環境を用意することで、選択の幅を広げることができ、理想的なサービスを受けやすくなってきています。

子どもの未来と一緒に考えることができる社会づくりに、これからも当センターが貢献するよう邁進していきます。これからも引き続きご支援の程宜しくお願い致します。

編集後記

エリザベス女王と安倍元首相の国葬の参列者……。英国ではマスク着用者がいなかったのに対して、日本では全員がマスクをしていました。

いつまでもマスクの呪縛から逃れられない私たち日本人……。最近では小さい頃からのマスク生活で、外すことに抵抗感を持つ若者が激増しているそうです。そして日本人のお家芸である同調圧力「マスクをしないと白い目で見られるのでは？」という過剰な自意識も一因なのでしょう。新型コロナウイルスによって確実に表面化した「分断」これは、これからもっと深まる可能性があります。私たちは、どのように考え、生きていけばよいのでしょうか。頭の片隅にそんな「モヤモヤ」を感じながら、日々を過ごすことになりそうです。四四二年ぶりの皆既月食と惑星食の競演……。多くの人々がカメラや双眼鏡を手に夜空を眺めていました。まるで、コロナ禍でうつむいた顔を少しでも上げているようでした。さて、今年も望みの門クリスマス会を対面形式で開催します。感染症対策に十分配慮したうえで、主イエス・キリストのご降誕を皆さまと大いに喜びたいと思います。